

■基調講演1 「汚れた川を蜚舞う川に再生、その手法を学ぶ」

-市民力・地域力を結集・グラウンドワーク三島の挑戦-

特定非営利活動法人グラウンドワーク三島 事務局長 渡辺 豊博 氏

- 東京農工大学の出身で、非常勤講師としてお世話になっている。今日は、私の「ふるさと」、三島の話を見せていただいて、お役に立てばと思う。
- 「グラウンドワーク」とは、「ふるさと」は誰のものかという問いかけである。「協働」しない「まちづくり」というのはありえるのか。まちは「行政」のものではなく、住民のものである。
- 今までのまちづくり、公益的な活動「公共事業」は、「公（おおやけ）」が「狂（くるう）」で「公狂事業」、これからは「公（おおやけ）」が「協（きょう）」と書いて「公協（こうきょう）」事業。「協働」という字は、「+（プラス）」に「力（ちから）」が3つ、「力」の一つは「市民」。日本は民主主義国家で主権在民なので、良い部分も負担の部分も担うことになり、政策の結果の負担は、市民やその子や孫に全部引き継ぐことになる。その負担を解消したしていくことを「協働」というのだと思う。「力」のもう一つは「行政」、もう一つは「企業」、そして「+（プラス）」はNPO。真ん中にいて「市民」「行政」「企業」を調整し、それぞれの得意技を引き出し、目的意識を一つにし、一体化し、効率的なまちづくりを進めていく。「協働」は「当たり前」であるのに、今言うのは、行政に資金が無くなったからではないのか。
- 「協働」というのは、自分の「ふるさと」を自分たちの努力と知恵と試行錯誤で良くしようとする行為で、孫子のために働くことだから苦しいものではない。時間があるときに、ゴミ袋やメモ用紙を持って公園を歩いて欲しい。「ここはこうなるといいな」「ここにちょっと公園があって、ちょっとベンチがあればいいな」と思ったら、市役所に電話するのではなく、自分でどこからか要らない材木を使って作りおけばいい。必ずしも市役所が置かなければならないことはない。使っている市民が利便性を高めるために置いて何の文句があるのか。良いことから堂々と黙ってやって欲しい。
- 三島はなぜ「グラウンドワーク」なのかというと、「みんなでやれば怖くない」ということだからだ。しかし、一方では「みんなでやると地獄だぞ」ということでもある。人間は一人で生きた方が幸せだが、できない。だから、我慢しないといけない。我慢することで大人になり、人のことを考えられるようになる。「ボランティアは人のためにやっている。」これは偽善の言葉だ。ボランティアは自分のためにやる。結果として、人が楽しくなる、地域が良くなる。自分が良い気持ちにならないで、どうして他人のことをやれるのか。自分のためにやる。結果としてまちのためになる。三島はまちがダメになって、そして責任をなすり合い、みんなで一緒にやろうとしないからまちがダメになった。
- そこで、私たちは、イギリスの「みんなでやればこわくない」というサッチャーさんが考えた運動を導入して、三島というまちを変えようと思った。三島はちょうど富士山から30キロの地点で、富士山に降った雨が地下を通り、三島の駅付近が水源地ということで、水が湧き出す、まち中に水が流れる、まさに水の都だということになる。
- まちを考えるとときに大切なのは、「共有」意識を作ることだ。府中の宝物は何か。三島では、「水辺・川を守ろう」というと70%の人がこの指にとまってくれる。府中では何か。ケヤキ並木？競馬場？刑務所？何か共有した宝物を探さないといけない。それが「協働の」第一歩だと私は思う。
- 皆さんの原風景・原体験とはどんなものか。府中市民と言っても外部から来た方もいるだろうから難しいとは思いますが、何か共有のものを見つけ、もう一度再発見・再認識し、子ども達

に守るべきもの、帰るべき場所を教えていかなければいけない。そのための試行錯誤をした上で、その原風景・原体験を守るために、また、どうなっているかを確認し、それを伝えることだと思う。または守るための活動こそが「協働」の活動になる。みんなが大切に思うものを、そう思える人が寄り添って何かするという事は当たり前のことだ。しかし、誰かが強い想いを発しないと物事は動かない。富士山が世界遺産になったのは心の拠り所だからだ。府中市民の心の拠り所は何か、それをみんなで守ろうというのは当たり前である。

□三島の源兵衛川は、昔は水を湛えていたが、全く水がなくなってしまった。水のなくなった川の写真は負の遺産、これが我々の活動の原点だ。50年かかって水が消えたから、50年かかって水を戻そうという事だ。これを子どもたちに見せないといけない。「大人はバカだ、企業は自分の利益のために周りのことを考えず、自分の会社のことしか考えない。こういう時代があった。」ということなぜ子どもに教えないのか？タバコも吸わない、酒も飲まない子どもになぜゴミ拾いをさせるのか。酒を飲んで、タバコを吸う大人がゴミ拾いをすべきであって、子どもがやるのはおかしい。子どもはどんどん大人に対して不信感が出てくる。

□上流に地下水を汲み上げる企業が来た、人も、上水道も増えた、森も守らない。1つの原因ではなく複合的な原因だ。これは猿や犬がしたことではなく全部人間がしたことである。企業は、1日10万トン以上、のべ150万トン以上の水を汲みあげた。今でも規制はかかっていない。三島は厳しい規制をかけているが、上流側の市町村は規制を入れようとしらない。こういう厳しい現実の中で、今までは企業に対して「反対」して「出ていけ」「水を汲みあげるな」という運動しかしていなかった。

□しかし、「グラウンドワーク」は「パートナーシップ」、「協働」だ。それぞれの「役割」と「立場」とを尊重し、企業活動も活発に出来ながら、ここに水を戻す方法を、頭を使っていこうということだ。企業人は専門性があり、多様な知識を持っている。この知識を社会に出して貰いたいという発想だ。出て行ってという発想ではない。そして、川を汚したのは誰か。下水に繋がらない、この川沿い200軒の人たちだ。三島の人たちがゴミを捨てていった。なのに、「こんなものふたをしてしまえ」「昔は最高だった」と言う。ごみ拾いしようと言っても誰も来ない。市民の知恵を集めないと解決しない。原因者でもあり、知恵も持っているし、お金を持っている人もいる。口ばかり達者な人もいて、行政はそういううるさい人たちが怖いから地域に入って行かない。ぼくらは、まちを良くしたいから、ゴミを拾って、きれいになる。12年間関わっている。市民は何をしたかと言うと、この川の原風景を思い出した。そして、原風景をどうしたら元に戻せるかという発意をした。自分たちで意見を出し合った。出し合ったので責任を持って、そのあと維持管理をしている。

□元々、蛍はいて、とんぼは53種類いた。汚れて4種類になったが、その後我々は28種類まで戻した。そして、蛍が乱舞した。大体4月29日に蛍が飛び始め、6月中旬に終わる。この間に大体3000から5000匹、1日200から300匹、新幹線の駅を降りて10分の場所、歓楽街のど真ん中を蛍が乱舞する川が通っている。これは絶対に行政の力、市長の強いリーダーシップだけではやりきれない。三島という11万人だけの小さなまちの例だが、その手法には共有性があるのではないか。

□協働の成果として何が出来ることは二つある。一つは「社会的な波及効果」。はっきり言えば「経済的な波及効果」だ。三島においては15年間、大体13年目位に入るが、大体観光客の呼び込み数が30万人位だったが、去年の数字で350万人に増えた。現在、東西方向の中心商店街、740mに店が240軒あるが、1軒も1店も空き店舗はない。是非見に来て欲しい。環境再生から始めたが、完全に観光再生・地域振興に変わっている。人が動き出した。



観光の資源が無ければ、人的な資源地域が無ければ、まちは活性化しない。お金が動かなければ若者は滞留しない。だから、虫だけでは食えない。虫だけでは生産性がないから何にもならない。

□しかし、2番目の効果は「共有の波及効果」だ。子ども達の心に大きな何かを残すことができるかという意味では出来ると思う。ある時、鎌倉から夫婦が来て、そのときご主人

人がタバコを吸って川に捨てた。そのとき6年生の男子が走って行って、「ちょっとまって。おじさん、今この川にタバコ捨てたね。この川はあそこにいる太ったおじさんを含め、みんなできれいにしてきた川だ。我々の川にゴミを捨てるとは何事だ」と文句を言った。私は小学生が大人に対して駆け寄って注意をするという勇氣にもものすごく感動した。みなさん、注意できますか？大人でもすごく怖いことではないのか。それを堂々と注意できる、正義というものに対して戦おうとする勇氣。これこそ愛郷心であり、愛郷心あるからこそ愛国心が育つ。みんなでふるさとを守ろうという協働の作業がなくして、共有の意識は育たない。そういう意味では、彼の小さな行動でしたが、褒めまくった。さらにご主人が言った、「鎌倉から来た」の言葉に対して言ったその子の言葉に驚愕した。「鎌倉というまちは、まちの文化と歴史と景観で売っているまちじゃないか。そこに住んでいる人が三島に来て、ゴミを捨てるとは何事か」

□「グラウンドワーク」の運営思想は協働で、大事なことはみんなで共有意識を持つということである。そして協働は、少しずつしか効果は出てこない。でも小さなことから始めて欲しい。そしてまず、情報収集・分析課題。府中のまちは本当に素晴らしいが、本当にまちを知っているのかと聞きたい。私たちは「グラウンドワーク」を始めるときに、約1年半まちを歩きまわった。ずいぶん沢山の「発見」と「がっかり」があったが、多くの「がっかり」の場所を調べたらみんなまちの宝物だった。湧水地はゴミが捨てられ、そのゴミの山。鎮守の森が間伐もされず、日の差さない森に弱り果てていた。小さな川は埋められる寸前だった。湧水地の井戸は埋められて壊されそうになっていた、などたくさんあった。だから散歩をするなら毎日コースを変えて、気付いたことは写真を撮って、声をあげて欲しい。1人では小さいように見えるが、2人になったら公共活動になる。1人は個人性、私益性。2人以上なら公共活動、夫婦で声をあげて欲しい。小さな声は無視され、バカにされる。でも小さな声から始めるしかない。そして、社会を変えよう。みなさんが考えるのです。府中から変えよう。なぜなら一番大事なものはふるさとだ。

- 私が最近一番思っていることは、現場に来る人が少ないことだ。20年間やってきているが、本当に悲しいことだ。口で言って、会議に行って、現場に来るかというのと、全く来ない。でも現場で竹を切って、きれいになった後の爽快感は気持ちいい。本当にビールが旨い。うちの合言葉は、「右手にスコップ、左手にビール」。議論よりアクション。ムリはダメ。敢えて言うとボランティアもダメ。ビジネスじゃないが、少しでもお金が発生するようにしていかないと、責任がないから思い付きになる。そしてお願いは、必ず小さなことから始めて、答えを出して欲しい。
- 「グランドワーク三島」はこの20年の間で60ヵ所の実践地を持っている。実績を持っているから地域の人、広域団体と連携が強い。三島は11万人、124町内会があるが、私が今、関わっているのは48町内会、全体5万3000人。11万4000人のうちの5万8000人と関わっている。毎年の我々の3年間の活動で大体2万3000人ぐらいの伸びで参加してもらっている。これは動いて、答えを出して、そしてその試行錯誤の中から更なるまちづくりのノウハウを、内発的・自発的に生み出していくからだろう。
- 私も第2のふるさというわけではないが、この府中の地域資源をもう一回引っ張り出し、それを確認し、検証し、実態を把握し、市民として何が出来るかをまず考えて欲しい。その上で、再生プラン・アクションプランを作り、そのプランの中に市民・行政・企業、そして有識者・専門家、あるいは教育機関・学校の役割を明確化して、役割分担をはっきりさせながら、全体としてどのくらいのお金がかかるかを明確にし、みなさんお金が出せるのか、知恵が出せるのか、汗がかけられるのか、ということも更に明確化して、一つずつ、一つずつ、実証実験を3年ぐらいくり返しすると、まちづくりの進化を市民自身が飲み込めるようになるのではないかと理解している。三島、一市でそういう本質性、社会実験を20年以上やり続けることで、この地べたを這いずり回るまちづくりの力が、地域を変えるのだということを実証したく、がんばっている。みなさんも是非がんばっていただきたい。